

第2回

チャプレンより



與賀田チャプレンは立教英國学院の学校付き牧師です。礼拝や聖書の授業ではさまざまなお話をさせていただきます。



第二七四号 一〇一六年二月二日
発行者 立教英國学院
RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND
GUILDFORD ROAD, RUDGWICK RH12 3BE
<http://www.rikkyo.co.uk>

クリスマスのプレゼント
チャプレン 司祭 與賀田光嗣
クリスマスの季節には、教会や教会附属の幼稚園などでは、よく聖劇（ページェント）が行われます。聖劇とは、クリスマスの出来事を劇で表現するというもので、イエス様の御誕誕にまつわる話の劇です。

劇では、まず天使ガブリエルが聖母マリアのもとに訪れ、イエスの懷妊を告げるところから始まります。

劇の中では詳しく触れられていませんが、この時マリアは夫となるヨセフと婚約をして（当時の常識で考へると、二人とも一五、六歳の若さです）、結婚のその日まで離れて暮らしていました。ですから、これは他から見ると不義の妊娠であり、当時そのような女性は石打ちで殺さなければなりませんでした。

ヨセフはマリアの妊娠を知り、密かに婚約を解消しようとします。未婚であれば、マリアは殺されなくてすむからです。代わりに、二千年前の女性に人権もない時代に、シングルマザーとしてマリアは生きなくてはなりません。しかし、ヨセフは夢の中で天使に勇気づけられ、マリアとイエスを守る生涯を決意した。

クリスマスのプレゼント
チャプレン 司祭 與賀田光嗣
クリスマスの季節には、教会や教会附属の幼稚園などでは、よく聖劇（ページェント）が行われます。聖劇とは、クリスマスの出来事を劇で表現するというもので、イエス様の御誕誕にまつわる話の劇です。

劇では、まず天使ガブリエルが聖母マリアのもとに訪れ、イエスの懷妊を告げるところから始まります。

劇の中では詳しく触れられていませんが、この時マリアは夫となるヨセフと婚約をして（当時の常識で考へると、二人とも一五、六歳の若さです）、結婚のその日まで離れて暮らしていました。ですから、これは他から見ると不義の妊娠であり、当時そのような女性は石打ちで殺さなければなりませんでした。

ヨセフはマリアの妊娠を知り、密かに婚約を解消しようとします。未婚であれば、マリアは殺されなくてすむからです。代わりに、二千年前の女性に人権もない時代に、シングルマザーとしてマリアは生きなくてはなりません。しかし、ヨセフは夢の中で天使に勇気づけられ、マリアとイエスを守る生涯を決意した。

聖劇では、ヨセフ役が「トントン、トントントン、一晩泊めて下さいな」と歌う一幕があります。それに答えて宿屋役が「どうでもどつてもお気の毒、部屋はどこも満室で、向こうの宿屋へ行つて下さい」と歌い上げます。これが二、三回繰り返され、若い夫婦はたらい回しにあい、最後にやつと空いている馬小屋へ二人は通され、そこでイエス様が生まれになります。

マリアの出産が近づいた時のことです。ローマ帝国皇帝が全領土の戸籍調査をするため、全ての領民は本籍地に行かなければいけませんでした。戸籍調査をし、税収を確定させて翻弄されます。

身重のマリアと共に、ヨセフは自分の本籍地であるベツレヘムに着きます。宿屋を探しますが、どこも満員で泊まることはできませんでした。いえ、もしこの夫婦にもっとお金があれば、立派なところでしたら泊まることもできただかもしませんが……

宿屋の少年は台本通りにマリアとヨセフを追い返しました。ですが、その後に、泣きながら「イエス様、僕の家へおいでよ！」と叫んだのです。

この日の聖劇は、例年とは異なり、宿屋の主人の家にて、イエス様がお生まれになる」ととなりました。



ニューホール前でお昼寝をする野生の狐。
終業礼拝後からよく姿を現すようになりました。

二千年前のクリスマスの出来事は、私たちの無理解や、冷たさ、自己保身を表しています。同時に、神様は私たちの貧しさや弱さの只中に来られることを意味しています。そして、私たちの心が開かれるることを通して初めて、イエス様を迎えることができるることを教えてくれます。

その意味で、二千年前には「宿屋は満員ですが、おかげりください、他を当つて」という宿屋の役割が必要でした。

聖劇では宿屋役はあまり人気がありません。マリアとヨセフとお腹の中のイエス様を、寒空の下へ追い返す役だからです。

ヨーロッパのある村の教会で、クリスマスイ

ブの日に、聖劇が演じられていましたのことで、例年通り、マリアとヨセフを追い返す一幕がやってきました。

宿屋の少年は台本通りにマリアとヨセフを追い返しました。ですが、その後に、泣きながら「イエス様、僕の家へおいでよ！」と叫んだのです。

この日の聖劇は、例年とは異なり、宿屋の主人の家にて、イエス様がお生まれになる」ととなりました。

一目次一

第2回 チャプレンより	ページ
アウティング	1
オープンディ	2~3
サイエンスワークショップ	4~5
UCL-JAPAN Young Challenge 2016	6
特集 Language in use 立教英國学院の「英語」	7
部活動での活躍、ミュージカル「Annie」観劇	8~10
地元のユースクラブ訪問（小中学生）	11
ルーマニアの寒村の子供たちに贈る、靴箱に詰めたプレゼント／交換留学生の滞在（中学部二年）	12

特集 Language in use 立教英國学院の「英語」



小・中学生アウティング

朝起きて、見上げると真っ青に晴れた空。なんとラッキーな！まさにアウティング日和です。小中学生の目的地はワインザーエ城。うれしいなあ、と思わず笑いがこぼれるほどよい天気です。

ロンドンの真西にある、「エリザベス女王の週末の城」に着くと、ちょうど十時半。十一時の衛兵交代見学にちょうどいい時間です。ロンドンのバッキンガム宮殿に比べると小規模ですが、ここワインザーでも見られます。時間が近づくと、街の通りに向こうから器楽隊の音楽が聞こえて来、衛兵たちが勇ましく行進してきました。キラキラした金糸の飾りのついた真紅の制服は、とてもキリッとしていて、姿勢もよく、肩で風を切るような衛兵たちの姿は格好よいものでした。

お昼まで時間がちょっとあるので、このあとに、有名なイートン校 Eton Collegeへの散策に出発。実はワインザー城から歩いて十分ほどです。石造りの美しいたずまいのイートン校の建物の間に立つてみると、お昼の時間なのか、イートンの制服をまとった学生たちがハウス（寮）に帰つてゆく姿が。今日二度目のラッキーです。白シャツに白タイを結び、長めの裾をひるがえした真っ黒なスーツ姿にじんわりと感動を覚えました。

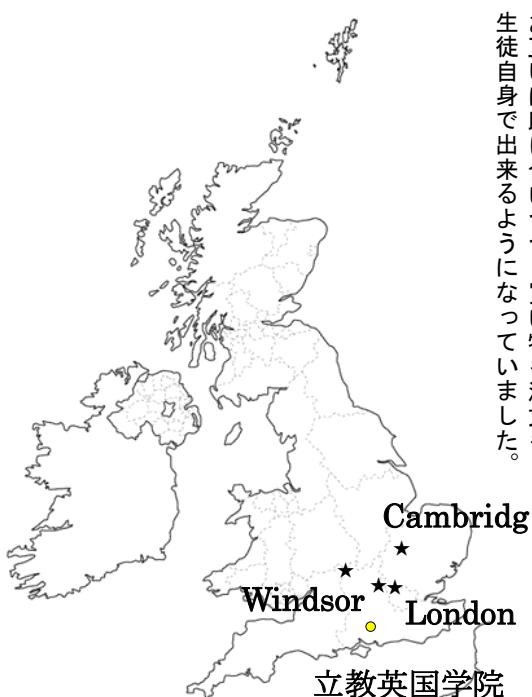
お昼は班に分かれて、思い思いに。先生に教えてもらつた、タイ料理のバイキングのお店でおなか一杯食べた生徒もあれば、久しぶりのマクドナルドや、カフェのランチも楽しみました。

午後一番にワインザー城内の見学に入りました。事前に、「What is this?」シリーズと題して、ワインザー城の六枚の写真が、毎日少しづつ教室に貼られましたが、ワインザー城では、「これは何だろう？」と、実際に

探したり、想像したりするしくみ。壁にくられた十字型の穴や、四角形に切り込まれた城壁のてすりの謎を予想したり、どう見ても彫像にしか見えない時計に首を傾げたり、ピーター・ブリューゲルの著名な絵画も、先生に説明してもらいました。予想外だったのは、濃い緑色のタンブラー。あれだ！と見つけると、思わず大きな度肝を抜かれてしました。写真で見ると、かわいらしいタンブラーだったのですけれど。

お城から出てくると、居住スペースの衛兵が午後の交代で行進してくるところに出会いました。本日三度目のラッキーです。真っ青な青空に、はちみつ色の宮殿。真っ赤な衛兵。くつきりとした風景が今でも心に焼き付いています。

夕方から近くのショッピングセンターにうつって、ショッピングと夕食を楽しみ、ゆつくりと学校に戻つてきました。四月に入学した生徒も、九月に入学した生徒も、お互いに助け合いつつ、買い物も注文も、生徒自身で出来るようになつていました。



小6～中3 Windsor

OUTING



【2学期の行事】

- 9月 4日 始業礼拝
- 9月 5日 高等部実力テスト
- 9月 11日 避難訓練
- 9月 17日 2016 UK-Japan Scientist Workshop 報告会
- 9月 18日 UCL-JAPAN Young Challenge 2016 報告会
- 9月 22日 午後ブレイク
- 9月 25日 第36回因数分解コンクール
アップルデイ外出
- 9月 27日 全校写真撮影
- 10月 5日 ロンドン日本人学校文化祭外出
- 10月 5日 アウティング
- 10月 8日 実用英語技能検定第一次試験（1級、準1級）
- 10月 9日 実用英語技能検定第一次試験（2級以下）
- 10月 14日 教室、ドミトリームーブ
- 10月 15日 オープンデイ準備期間（～10月 22日）
- 10月 23日 オープンデイ
- 10月 24日 オープンデイ片付け、オープンデイ閉会式
- 10月 30日 生徒会主催 Guildford Shopping

- 11月 6日 実用英語技能検定第二次試験（準1級～3級）
- 11月 10日 CAMBRIDGE 英検 KET、PET
- 11月 14日 Youth Club 訪問（小学部、中学部2年生）
- 11月 14日 CAMBRIDGE 英検 FCE
- 11月 23日 期末考査（～11月 27日）
- 11月 29日 答案返却（30日）
- 12月 1日 スクールコンサート
- 12月 2日 生徒会主催クリスマスコンサート・高3生を送る会
ELMBRIDGE VILLAGE 訪問 キャロリング
クリスマス礼拝
- 12月 3日 終業礼拝 生徒帰宅
- 12月 4日 中学部3年生補習（～12月 9日）
- 12月 10日 中学部・高等部入学試験 A日程（11日）
中学部3年生帰宅

オープンデイ

十月二十三日（日）秋晴れの中、オープンデイが行われました。今年は例年に比べ二週間早い日程での開催になったので、準備の時間も短くなりました。無事にこの日を迎えるのかという不安と焦りに見舞われる生徒もちらほら見られましたが、最後の最後まで粘り、そして、「だわって何とか準備完了！」今年のオープンデイのテーマは「Inspire」です。

オープンデイは、立教英國学院を皆様に知つてもらうための日です。保護者の方や兄弟姉妹はもとより、地域の方々、ホストファミリーになつてくださつた方々、交換留学で知り合つた友達、そのまた友達や家族……と、本当にたくさんのお客様に「来場いただき、五〇〇名を超す大盛況となりました。

小学生「Enjoy! Tea Time」

中学校部一年「空に描く夢」

中学校部二年「ガリガリ君」

中学校部三年「ポケモン 魂（ソウル）」

高等部一年「NIPPON GO」

高等部三年生は、食堂や焼き鳥、から揚げ、和菓子・パン売り場、バザーに福引といつた各ブースでお客様をもてなしました。

また、スクールコンサートや、クラスでの展示とは別に、学年関係なく集まつて活動する生徒会主催の企画もありました。剣道、パフォーマンス、茶道、琴、フラワー、アレンジメント、チャリティー、演劇の七つの企画に分かれて教室展示や舞台発表、デモンストレーションを行いました。

「オープンデイの思い出」

中三 大石 桜子

ドラマロールが早まっていくと同時に自分の心拍数もバクバクとあがつて行くのが分かつた。ドラマロールが止まり周りが一気に静まりかえつた。そしてまさかの総合優勝第一位。

「せーのつ。」

初めてだつた。くす玉を割つたのも、こんなにクラス全員で喜びあつたのも。毎年やつてくる立教最大イベント、オープンデイ。何度経験してもその年はその年の思い出として、今年は今年の思い出として、決して飽きる事無く色々な形となつて私の記憶の中に深く刻まれていく。そして、色んな形の中でも今回は特別だつた。一人でも足りなかつたら優勝なんか出来なかつたかも知れない。このクラスのメンバーがいて、そして心強い担任の先生、副担任の先生がいて。くす玉のヒモを引いた瞬間、この感謝の気持ちと嬉しさでじんわりと目が熱くなつたのを覚えている。

励まされる事、励ます事。悩みを聞いてもらつた事、悩みを聞いた事。こんな風に人に支えてもらつてはかりいた私も今年は少し、他人を支えるという事がこの一週間で出来たかも知れない。多くの事を学べた一週間だつた。クラスのメンバー、先生、そしてこんな素敵なイベント、オープンデイがある事にとても感謝している。



中3「ポケモン 魂（ソウル）」



小学生「Enjoy! Tea Time」



小学生「Enjoy! Tea Time」



高1「世界はこれをトイレと呼ぶんだぜ」



中2「ガリガリ君」



OPEN DAY チラシ配り

毎年オープンデイのチラシを地元の方々のポストに入れさせてもらっています。中には生徒の姿を見つけてお家の中からわざわざ出てきてくださった方と会話をする生徒の姿もありました。このチラシを見てオープンデイに来て下さる方も毎年たくさんいらっしゃいます。



『有終の美』

高一千野智哉

中一 横田 碧

つた。

「模造紙部門第一位は……（ダカダカダカダカダカ……ダン！）高等部一年 世界はこれをトイレと呼ぶんだぜ」

私は、OPEN PAY で模造紙班として活奮がおさまらなかつた。これを聞いた時 とひ上かゝで喜んで興奮がおさまらなかつた。

徐々にテンションが上がってきたのは
クラス展示の受付をしていたときだった。
そこで、出て来た英国人の方が“Amazing!”
と言つてくれた時だった。これならまだ
「あるある」だと思ったが、よほど私たち
のクラス展示を気に入つてもらえたのか、
もう一度、見に来てくれたのだ。これには
私もうれしくなつてしまつた。

そして OPEN DAY は無事終了し、翌日表彰式があつた。そこでは「模造紙部門第一位」の他にもう一つ、感極まる賞を頂いた。それは、「お客様賞第一位」だった。これは、来てくださったお客様の投票で決まる賞だ。OPEN DAY は、ただの自己満足ではなく、お客様のためにやるものだと思つてるのでとてもうれしかつた。

「オープンデイの準備期間、長いね。」
オープンデイがくるまではそう思っていたのに、オープンデイが終わってしまった今となつては、とても短い時間だったな、と思うようになった。
今年の中学生一年生の企画は「空に描く夢」。飛行機についての企画である。この企画の中には、最新の飛行機、紙飛行機、ジブリに登場する飛行機、飛行機の歴史という四つのブースがある。私はその中の飛行機の歴史のブースを担当した。飛行機の歴史は他のブースと違い、模造紙にまとめず、双六のようにしてまとめた。最初、先生からこの案を聞いた時、とてもおどりいだが、今思えばそれが一番良い方法だったと思う。この作業は意外と大変なものだった。
まず最初に、台紙となる空の絵を描くため、裏紙ロールというものにペンキで絵を描く。次に、その台紙の上にはるものをつけた。そして、飛行機の形に切り抜いた用紙の上に文章が書いてあるカードをはめたのだ。最後に、それを台紙にはつて完成了だ。私はそれを先生と二人でつくり、どんどん完成していくのを見るのは楽しいものであった。
一生懸命に物事に取り組むと、時間が過ぎるのがとても早く感じる。オープンデイ準備期間の私は、自分達の企画を作り上げるのに、また、よりよい企画にするのに、一生懸命だったからこんなにも時間が過ぎるのが速く感じたのではないだろうか。でも、私にとつてはその短い時間の中で、多くの事を学ぶことができた。例えば、努力は絶対に実るという事、何事も丁寧に行なえば、全てが悪循環にならずにすむという事、などだ。また、その作業が終わつた後、達成感も大きかった。オープンデイ当日も、先生方から褒めて頂き、とても嬉しかった。

私がオープンnedイを通して特に大切だ
と思った事は「努力する」事だ。なぜなら、
努力なしでは良い企画、充実した企画はつ
くれないと分かったからだ。でもこれは才
一ブンデイだけに言える事ではない。努力
をしないと何も始まらないという事も同
時に分かった。だから、約一ヶ月後にある
期末テストに向けて、「努力」してみよう
と思う。

最後に、この「努力」の大切さを改めて
知る良い機会となつた、このオープンnedイ
に感謝する。そして、より良い生活を送れ
るようになれば良いと思う。



オープンディイ準備期間



オープンディイ当日の中庭



高2 「NIPPON GO」

2016 UK-Japan Scientist Workshop

ケンブリッジ大学サイエンスワークショップ

高2 上坂 粋芳

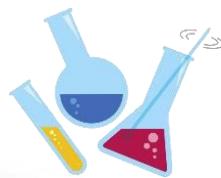
この夏僕は、二つのサイエンスワークショップに参加した。それによってこの夏は学びの多いものになった。その内の一つがケンブリッジ大学でのものだ。

期待と不安を抱きながら日本から参加する生徒が来るのを待った。その夜の自己紹介は、予想通りでありながらも、衝撃的であった。五つの目がある化石が好きという人がいたときの衝撃はその中でも格別だった。そしてその時点では、彼らが僕たちとはまったく異なる知識を持った、面白い人たちであることがわかった。

ケンブリッジ大学でのサイエンスワークショップというだけあって、各プロジェクトの内容もそうそうたるものだった。僕のプロジェクトは放射線に関するものだった。身近にも思えるこのプロジェクトだが、つかった実験器具は見たこともないようなものばかりだった。アルファ線や、ベータ線を雲のような形で視認する機械や、実際に原発で使われているらしいウランのピペット等々このプロジェクトだからこそ使えるようなものばかりだった。

それだけすごいワークショップに参加する高校生にはやはりそれだけの実力がある、その中で自分の能力の足りなさを痛感した。そして普段の自分の怠惰を悔いた。しかし周りの仲間や、ファシリティーターそして教授の助けのおかげで、何とかついていくことができた。

このワークショップを終えて最終的におもったのは、なにもこれは、進んだサイエンスを学ぶためだけではなく、自分という個を見つめなおし、理系として進むならこれからどうあっていくべきかを考えるためのものであつたように思える。それはもちろん勉強であつたり、周りの人とのかかわり方であつたりといろいろだ。そして言えるのは、このワークショップが、ぼくにとって、そして参加したすべての人にとって大きな糧となつたのは間違いないだろうということだ。



2016 UK-Japan Young Scientist Workshop: Outline Timetable at Cambridge

2016	breakfast 8.00-9.00 Murray Edwards	morning session 9.15-	lunch	Afternoon session - approx 16.30	dinner 18.00-19.00 Murray Edwards	Evening 19.00-22.30 Kaetsu Centre	
Sun July 17	participants arrive ~4pm at Murray Edwards College dinner in College 18.00, followed by meeting up in Kaetsu Centre Conference Room						
Mon July 18	B	Welcome and Orientation Kaetsu Centre	L	Projects	D	Let's Communicate in Japanese (led by students from Japanese students)	
Tue July 19	B	Projects	L	Projects	D	Gift Exchange and Cultural Evening;	
Wed July 20	B	Projects	L	Projects (Teachers Forum Kaetsu Lecture Theatre)	D	Outdoor Games (informal relaxation)	
Thu July 21	B	Whole Workshop Topical Discussion	Visits in Cambridge		D	Presentation Preparation	
Fri July 22	B	Presentation Preparation	L	Team Presentations Kaetsu Centre	Workshop Dinner Clare College		
Sat July 23	B	Departure	Leave to Heathrow 04:00, est arrival time 06:00 LH925 08:30 T2				

UCL-JAPAN Young Challenge 2016

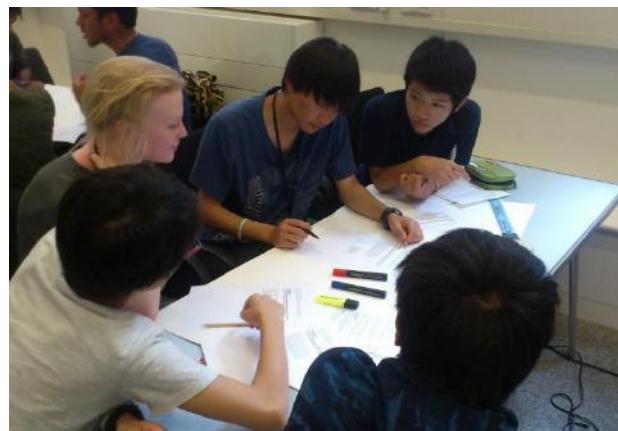
今年もUCL-JAPAN Young Challengeが7月22~31日に行われました。このサマープログラムは、2015年にスタートしたので、今年は第二回目の開催になります。開催の契機は今から約150年前、ペリー来航のうちに、長州藩と薩摩藩から英国にひそかに渡った人々がユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)で学んだことにあります。

1854年、アメリカのペリー来航によって日本は鎖国方針を転換し、諸外国との外交を再びスタートしました。当初は日本人の海外渡航が許されぬ中、長州藩と薩摩藩から2つのグループがUCLで学び、のちに成立した明治政府の礎を築くにあたって大いに貢献する存在となりました。2013年はその渡航から150周年にあたり、彼らの偉業を祝う様々な催しが行われましたが、その集大成として、将来グローバルに活躍する人材を育てるため、日英の優秀な高校生を集めてUCLを主会場としたサマープログラムを開催することになりました。立教英国学院は協賛団体として参画しています。

今年のプログラムは、教授や研究者の方による講義やワークショップ、メインイベントであるGrand Challengeと題したディベートと発表を中心とした取り組み、英国で活躍する方々とのディスカッションの3本柱で構成されました。

	午前	午後	夜	場所
DAY 1		到着		立教英国学院
DAY 2		Icebreaking（初顔合わせの交流プログラム）		立教英国学院
DAY 3	(ケンブリッジへ移動)	ケンブリッジ観光	—	ケンブリッジ大学
DAY 4	研究者の方々による講義	研究者の方々による講義	ケンブリッジで学ぶ日本人学生の方々によるパネル・ディスカッション	ケンブリッジ大学
DAY 5	(UCLへ移動)	シェークスピア文学をテーマにしたワーキング UCL内ツアー	UCLの教授によるグローバル時代の講義 英国の大学で学ぶ学生による海外大学進学に関する講義	UCL
DAY 6	〈日本人高校生〉英語レッスン 〈美国人高校生〉日本語レッスン 研究者の方々による講義	Grand Challenge Workshop	英国で活躍する方々によるパネル・ディスカッション	UCL
DAY 7	〈日本人高校生〉英語レッスン 〈美国人高校生〉日本語レッスン 研究者の方々による講義	Disaster Symposium	レセプション	UCL
DAY 8	ロンドン内をスタンブラー	グループ プレゼンテーション	修了式 Farewell Party	UCL
DAY 9		ロンドン市内観光		UCL
DAY 10		ウィンザー観光	(帰国)	

参加者は、日本の高校から約40名、英国の高校からも約30名が参加し、取り組みはほとんど英語で行われました。夜は大学の宿泊施設で過ごし、共に宿泊した英国人高校生たちと夜遅くまでお喋りを続け、やや疲れ気味の様子も見られましたが、海外に羽ばたく気持ちを高めた者、新たな友を得て世界を広げた者、英語力に自信を強めた者、問題意識を高めた者など様々であったようです。特に、本校から参加した高校3年生の一人が、去年参加した時の口惜しさを払拭するべく、どこに於いても積極的に意見を述べ、質問を発し、英国人高校生たちとも交流を深めて、参加者たちのモデルケースとして活躍したことは、特筆に値するでしょう。



英語科フィールドワーク

第二回

今学期二回目の英語科フィールドワーク。Horsham という大きな町に中学一年生・二年生合わせて二十四名で訪れた。今回の目的も前回と同様オープンデイ（文化祭）のビラ配りだったが、もう一つミッションを加えて更に高度なことに挑戦した。チラシよりもっと立派なカラーポスターをお店に貼つてもらうというミッションだ。

「チエーン店は難しいかも知れませんから個人経営の小さなお店が狙い目ですよ。」先生からアドバイスをもらって早速お店巡りを始めたが、イギリスは「チエーン店の国」、ポスターを快く貼つてくれるお店を探すのは難しい。

「マネージャーと相談しなきゃダメだって言されました……」

「お店には貼れないけど、中のスタッフ一ムならいいって言されました！」

様々な報告がある。そして「証拠」として、貼つてもらったポスターとお店の人と一緒に写真を撮つてくる、というタスクもある。教科書で英語を習い始めてまだ数ヶ月の中学生達には少しタフではあったが、習った英語と単語を駆使すれば何とかなる、大切なのは勇気と笑顔！これまで何度も行って来たフィールドワークで彼らが実感していることだ。

その甲斐あって今回もかなり善戦した。そして良い写真を何枚も撮つてきた。

小雨が降りしきる生憎の天気だったので「今日はお店を中心に戻るといいですよ。」とアドバイスをしたつもりだったが、前回のリベンジ！と道行く人に片っ端から声をかけている班もあった。

オープニングのチラシを手渡して日時や内容を簡単に紹介してから最後に自分

の英語についてコメントを書いてもらうというタスク。

正味三十分のフィールドワークだが、表裏の用紙に全部コメントを書いてもらつた女子生徒もいた。全部で十六人分あるので、コメントを書いてくれなかつた人も合わせると、きっと二十人以上の人達に声をかけたに違いない。

もちろんあまりコメントをもらえなかつた生徒もいた。一枚もポスターを貼つてもえなかつた班もあつた。でも教訓はいつもある。今度はもっと積極的に話しかけよう。笑顔で話そう。勇気を出して話しかけてみよう。

フィールドワークの目的は着実に達せられつつあると思った。



Where?	house
Plan?	with family
How big?	+
Message:	Your English is very good I could understand all your question
RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND	

Where?	At friends
Plan?	YES
How big?	NO
Message:	Happy Christmas everyone.
RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND	

Where?	At home
Plan?	To spend time with my family
How big?	5 foot
Message:	Have a very merry Xmas
RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND	

フィールドワークで使用したコメント用紙



Where?	Cambridge
Plan?	Stay with family
How big?	2 daughters, son-in-law + Grandpa + Granddaughter
Message:	Hope you enjoy all the christmas festivites x
RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND	

Where?	Home
Plan?	yes
How big?	small
Message:	Have a great christmas
RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND	

Where?	With family in Cambridge
Plan?	To be all together and have a great time
How big?	5 adults 1 Grandson - 4 1 Granddaughter
Message:	Enjoy your Christmas - 8 months old Have fun, eat lots all the best for 2017
RIKKYO SCHOOL IN ENGLAND	

——数日秋にしては暖かな日が続いたが、今日は久しぶりに冷え込んだ。昨日がハロウィーン。町のあちこちにはまだカボチャのお化けや黒装束の魔法使い人形などの姿も見られるが、そろそろクリスマスの飾りつけも始まる頃。ということで、今日の中学部一年生フィールドワークは「クリスマス」について、街を行き交う人たちで働く人たちにインタビューすることにした。

実質今学期のフィールドワークはこれが最終回ということもあり、また、これまでのフィールドワークでの獲得ポイントの累計を前日に発表したこと也有って、今日は皆出かける前からかなりの意気込みだった。

「先生、余分のインタビュー用紙最初から貰えませんか?」

「今日は絶対Aさんに勝ちますよ!」

そう言えば、昨晩のうちに質問をワード文書にまとめてタイプをして覚えていた生徒もいた。

「今学期の獲得ポイントに応じて学期末に『褒美』をあげますからね。」

中学一年ぐらいだとまだこういう動機付けにも素直に反応してくれる。

もちろん『褒美』は用意してある。それ目当てでもしつかりイギリスの人たちと会話をしてくれればそれでいい。

実際、既にこの子達は英語で話す面白さを知っている。自分たちの英語が『使える道具』だということに気づいている。あとは「もっと伝えたい!」という気持ちになるまで、このフィールドワークをしつかり楽しんでもらわねばいいと思う。

Horsham の街に着くと、一緒に来た中学生部二年生と別れて中学部一年生の担当する場所までみんなで歩いた。

「先生、まだ!」

「集合場所を確認してからね。」
「そこ」に着くまでにインタビューや始めて
今日は「一体どんな」とになるのだろう?
明らかにいつもの二倍のテンションはある。
「はい、それでは「ここ」に三時五分に集合で
すよ。丸々三十分はありますからしっかりと
聞いてらっしゃい。」ハーハー!と三々五々
散らばりながらも早速そこまでインタ
ビューが始まった。
「あっ、その人はちょっと急ぎ足だからや
めた方がいいかも……」
と思うのは大人の感覚? そんな人とも
しっかりインタビューを始めている。中一
くさいの日本人の子供が「I'm practicing
English. May I ask you a few questions?」
と笑顔で近づいて、「だよよほほほのい」と
でない限り足を止めるしかないのかも。
今日は今までとは少し様子が違つてお
たことにも気付いた。この子達は、随分
色々な人に話しかけられるようになつた。
インタビューを始めたばかりの頃は、
「なるべくゆっくり歩いている「老人」に
話しかけて「じいじんさんさい」と勧めていた
のだが、今はもう、若い人や子連れのお母
さん、ビジネスマン風の男性やちょっと怖
そうなお兄さんにまでインタビューをし
ている。歩道に並べられたカフェのテーブ
ルでお茶をしている人たちに話しかけた
のところへ行つたり……。あまり人を選ばず
なくなつた気がする。誰にでも話しかけら
れる勇気、あるいは自信みたいなものが持
ててきたのかもしれない。
集合時間になるといつも通りの「あとも
う一人だけいいですか?」「この場所で聞
くならないでしょ?」が始まった。
視界にはほぼ全員集まっているのだが、
なかなかインタビューが途切れず、切り上
げるタイミングが難しい。

「はい、それでは行きますよーーー中1の先輩たちが待つてますからねーーー」駐車場へと歩く道すが、今日のポイントを言い合しながら、ワイヤーガヤガヤと楽しそうにやっていた。

インタビュー用紙を集めて教員室に医り、今日の収穫を一枚一枚見ていく。「クリスマスのメッセージ」を書いてある欄、という欄もあるのだが、これらはみなメッセージが書かれていた。

"Have a lovely Christmas!" "Good luck and enjoy your stay in England" "Well done! Better than my Japanese!" "Very good English. Very brave." "Enjoy your Christmas and have fun, eat lots! All the best for 2017!" "Ho Ho Santa's coming to get you!" などなど。

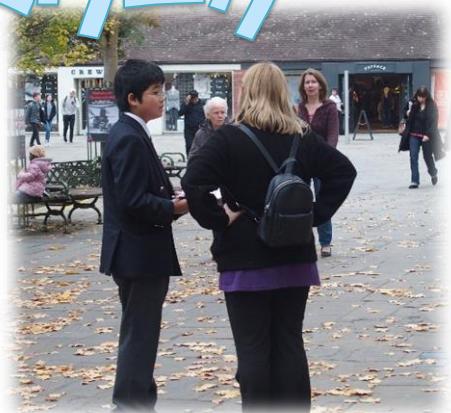
子供達がホールや廊下で集めていたイギリスの人たちからの温かいメッセージ。やつは、少しこれ込み始めた。量り合のトドのインターフォードたの、生徒たちと話していた人たちはみんな優しそうな笑顔だった。もうすぐそこまで近づいていたクリスマスがみんなを幸せな気分にしていたのかも知れない。そんな人たちが書いてくれた直筆のメッセージを見ながら地元のイギリス人の温かさをひしひしと感じた。「英語」はもちろん、それよりもっとっと大切なものを学んでいた子供達が少し素直しくなった。

今学期最後のフィールドワークも大成功だった。



英語科フィールドワーク

中学部1年生、2年生は週に1回英語の授業で町へ外出し、教室で学んだ英語を実際につかっています。今学期はオープンデイと、クリスマスについてのインタビューを行いました。本誌では第2回、第4回についての記事を掲載いたします。この他の回は本校ホームページに掲載しておりますので、ぜひご覧ください。



小学生 Active English 学びのねらい

Active English では名前の通り、英国で英語を学ぶ機会を生かして、あらゆる角度から積極的に英語を学ぶことを目標としています。具体的には、英語を聞いて、相手（話者、著者）の気持ちを理解し、自分の気持ちを英語で表現することを活動の中心としています。英語を学ぶことに終始するのではなく、英語劇、英語の映画、読み聞かせ、イギリス児童文学を通して、感受性を豊かにすることも重視しています。

英語の授業 (Active English) で映画鑑賞に行ってきました。小学6年生は、週に4回の EC (英会話) の授業とは別に、夕食後の時間をつかい、週に3回英語の授業を行っています。今学期はイギリスの作家ロアルド・ダールの作品を読んでいます。

ロアルド・ダールの作品が映画化されたものを Guildford の映画館に観に行きました。

その感想を英語で書き、プレゼンテーションも行いました。生徒の感想を紹介します。

☆My Film Review - The BFG -☆

P6 Masato Yano

What I like is the way he speaks. He makes a lot of mistakes when he speaks.

I learnt that BFG is a nice giant and he doesn't care when he makes a lot of mistakes while he is speaking. So I want to be like BFG but I don't want to make mistakes.

My favourite part is that the queen and servants drank frosbiscotte and did a very enormous fart. They even flied little!!!!

総合的な学習の時間

Active English での学びが他教科でも生かされています。今学期の総合学習では、学校で働くスタッフにインタビューを行い、「スタッフ紹介」の掲示物を作成しました。掲示物は教室棟の入り口に掲示し、インタビューをしたスタッフへ英語でのプレゼンテーションも行いました。



小学生 ACTIVE ENGLISH



部活動での活躍



フラワーアレンジメント部

立教のフラワーアレンジメント部ではクリスマスに向けてチャペル前に飾るリースを作りました。日本では毎年使える造花のリースをよく見かけますが、ヨーロッパではその年毎に生のリースを飾るのが一般的。中でも乾燥させたオレンジやシナモンなどの Christmas scents を使ったリースは、爽やかな香りが広がりクリスマスの雰囲気を更に盛り上げてくれます。

チャペルにリースが飾られた日の朝、礼拝でチャプレンがリースの持つ意味をお話ししてくれました。リースは赤、緑、白を用いて作られることが多いのですが、それらの色は「キリストの血」「生命力」「純潔」をそれぞれ表しているのだそうです。またクリスマスの一か月前になると、教会では水平に置いたリースの上に、ろうそくを 4 本立て、毎週 1 本ずつ灯りをともしていきます。これをアドベント・クランツといいます。1 本 1 本ろうそくに灯をともしながら心穏やかにクリスマスを待ち望む。生徒の作ったリースが、立教のクリスマスに素敵な彩を与えてくれることでしょう。



英国人の友だちが出演するミュージカル「Annie」観劇

中学部一年の女子生徒は地元のガールガイズの活動に参加しています。さまざま活動を通して、回数を重ねる」と地元の子たちとの英語でのコミュニケーションも増えています。今回はガールガイズの友だちが出演するミュージカル「Annie」を見に外出しました。

シアターへ行くまでの車の中では、アニメのあらすじを読む、内容を知っている子の話を聞く、「最近あの子はガールガイズを休んでいるからミュージカルの練習を頑張っているのだと思う」という話をしたり、アニーの「tomorrow」を歌ったり、ミュージカル鑑賞の準備は万端です。ミュージカルが始まるとすぐに友だちの姿を舞台に見つけました。いつもとは違う友だちの姿に感動すると同時に、良い刺激を受けることができたことでしょう。英語でのミュージカル鑑賞は中学部一年生には難しききました。

公演は地元のアマチュア団体によるものでしたが、歌やダンス、セット、音楽などは、流石は演劇の本場イギリス、プロさながらのものでした。生徒たちは二時間以上で、英語でのミュージカルに最後まで集中していました。イギリスでのミュージカル鑑賞はとても良い経験になつたことでしょう。今後も英国の文化や社会に直接触れます。機会を大切にしたいと思います。

地域との交流

地元のユースクラブ訪問（小中学生）

小学部と中学部二年生が地元のユースクラブを訪問しました。

ユースクラブの子供たちは毎週教会のホールに集まりさまざまな活動をしているそうです。

今回は本校の児童・生徒が折り紙とお茶についてのワークショップを行いました。折り紙では、グルーピングごとに工夫をして折り方を教えることができました。「英語で何て言うの？」と友だちに聞いたり、自分が知っている単語をつかつたりして、折り紙についてももちろん、学校生活のことなどの会話をしながら作品を作り上げました。中には、地元の子に日本語を上手に教え、「こんにちは」「こんにちは」「わたしのなまえは」「わたしのなまえは」と、まるで英語の授業の先生と子供たちのように繰り返し言い、ホールに日本語を響き渡らせるグループもありました。

折り紙の後には、先日のオープンディで「日本茶」についての展示を行った小学生が、日本茶の入れ方についてのワークショップを行いました。真剣に日本茶の説明をする子と実際にお茶の入れ方を見せる子の息はぴったりです。地元の子供たちも彼らの説明に興味津々です。入れ方を見せた後は、試飲タイム。「too hot」と気をつかりながらお茶を配る子、おかわりをすすめたらと先生に言われると、「Would you like more?」と自然に言う子供たちの姿には心しました。

恥ずかしがらずに普段学んでいる英語をつかおうとする子供たちに、逞しさと同時にフィールドワークや普段の学びからの大きな成長を感じました。今後もこのよう活動に積極的に参加していきたいと思います。

ルーマニアの寒村の子供たちに贈る、
靴箱につけたプレゼント～Christmas
Shoebox Appealへの取り組み～

昨年小学生のクラスで取り組んだ
Christmas Shoebox Appeal。今年も小学六年生と中等一年生が取り組みました。
十月「うん、去年参加した立教生たちから
「やらないの?」「今年もやったい」とい
う声が聞こえ始め、Christmas Shoebox の
「」と話すと全員の賛同が得られたので、
今年もまた取り組むことにしました。

Shoebox Appealはチャリティー活動で
すが、今の自分の生活とは異なる環境の子
ども達へ贈るプレゼントですから、受け取
る人の気持ちを考えて、靴箱に入れるもの
を考えなければなりません。取り組みのチ
ラシの写真からどんな生活をしているの
かを思いめぐらせ、どんなものを買ったら
よいをリストアップしてゆきます。何歳
の子どもへのプレゼントにしようか、女の
子か男の子か、も決めました。二、三人で
一箱を作る」として、一人六ポンドずつ
を出し合い、予算は十二ポンド。多くはな
い金額の中で、できるだけたくさんの中
に入れられるように、でも役立つもの、入っ
ているとうれしいもの、ふたを開けると
「わあ」と喜んでわらえるものを一生懸
命考えて、買いました。

電卓片手に、調整しながら物を力こに入
れてゆくのも勉強です。「たくさん使える
ようにしてあげたい」「これはかわいい柄
だからうれしいと思う」「あつたかいセー
ターを一つふんばつするから、ほかの物は
出来るだけ安いものでそろえよう」……パ
ッケージのデザイン、質量、色なども見
て、何を大切にして選ぶか。ペアで意見を
交わしながら、考え考え、決めている様子
が見られました。

買ってきたもののタグをはずして靴箱
につめると、手で抱えられるくらいの箱に、

ささやかですけれども細々としたものが
たくさん詰まつたプレゼントボックスが
できあがりました。今年も何人かが、「こ
んなプレゼント、自分もほしいなあ！」で
すって。去年も同じことを聞きましたつけ。

十一月十四日に村のロータリークラブ
の方が学校まで引き取りに来て下さいま
したので、「一人一人プレゼントボックスを
渡して、無事終了。十二月になりましたか
ら、そろそろクラブの方がルーマニアへ車
ではるばる運んで下さっている」とでし
よう。

たくさんの子どもたちが笑顔でクリス
マスを迎えるように。メリークリスマス！
「イギリス人の子?」
「スポーツは何をしていますか?」
「ちゃんと話しきれるかな?」
「いつから来るの?」

Christmas Shoebox Appeal ～せ～



靴を買ったあとに残る靴の空き箱に、こ
まごまとしたプレゼントを詰めて贈ると
いうチャリティー活動の一つです。地元ク
ランリー村のクリスチーニ教会とロータリ
ークラブが主宰するシユーボックス活動
では、ルーマニアの寒村の子供たちにクリ
スマス・プレゼントを送り届けます。

交换留学生の滞在(中学部一年)
十月三十日から一週間、中学部二年生の
教室にイギリス現地の学校から短期留学
生が来ました。同じ年齢の日本語を学んで
いる生徒です。留学生を迎えることは中学
部二年生にとっては初めての経験。
「いつから来るの?」
「イギリス人の子?」
「スポーツは何をしていますか?」
「ちゃんと話しきれるかな?」
「いつから来るの?」

生徒会主催のギルフォードへの外出の
行われた日の夕方、留学生は学校にやつて
きました。“Hello”という緊張感いっぱい
挨拶を交わし、一週間の始まりです。この
日のクラスのホームルームでは自己紹介
をしましたが、ほとんどの生徒が恥ずかし
そうに名前とよろしくお願いしますと言
うだけでした。留学生はこの日から立教英
国学院の一員として、衣食住すべてを本校
の生徒と共にします。もちろん、授業もす
べて一緒に出席です。英語の授業では、留
学生がみんなの勉強のお手伝い。他の授業
では、先生の話している内容をクラスみ
なで協力して勉強内容を伝えました。
あつという間の一週間でした。お別れの
日、最後にクラスで一人ずつメッセージを
伝えました。「このクラスに来てくれてあ
りがとう」「一緒にダンスができる楽し
かったよ」「この一週間はクラスがいつもよ
りも明るくなつたように感じました」。し
っかりと表現した思いは、留学生にも伝
わっている様子を強く感じました。別れを惜
しまる中学部二年生と留学生の姿に言葉や
文化の壁は全く感じられませんでした。

お別れの日はイギリスのガイフォーク
スディ。留学生を見送った後の夜空にはき
れいな花火が見えました。達成感と寂しさ
で一杯の生徒たちへのプレゼントのよう
にも感じました。この一週間だけでなく、
これからの長い将来にわたって、お互いま

び助け合える関係が続くことを願つてい
ます。留学生と共に過ごした時間は、眞の
国際人へ向けた確実な一步となつたこと
でしよう。

23年間清掃担当を務められた Mr.
Heather が離任されます。

学校行事の前には朝4時から校内の清
掃をしてくださるなど、学校生活をサ
ポートしてくださいました。

今までありがとうございました。

